

—文化は資本だ—創造経済と社会創造

■開催日 2015年3月8日(日)

■会場 大阪ビジネスパーク 松下IMPホール(大阪府大阪府中央区城見1-3-7)

(14:10~14:55)

特別講演 1「文化による社会の創造」

蔡國強(アーティスト)

2013年12月に、京都で「アジアの共生」をテーマにしたシンポジウムがあり、私も出席しました。今日この場では、それ以降の活動を中心に話したいと思います。文化による社会創造というテーマは、私にとっては大きすぎるので、まだ「模索中」としておきます。

(スライド投影)2014年8月8日に、上海の美術館で発表した《九級浪》です。私の故郷から出発した一艘の船にたくさんの動物が乗っています。もともとこの船は廃船で、自ら川を下ってきたのですが、あまりにも古かったため許可されず、海軍の船の上に乗せました。この99匹の動物には、狼やトラ、ライオンも羊もいますが、皆、大きな波で疲れている感じですね。

なぜ、このプロジェクトを行ったのかというと、この作品をつくる1年前に、中国では1万頭以上の豚が死んで、この川に流したことがありました。私にとっても衝撃的でした。上海の美術館から招待され、どのようなテーマで展覧会を開こうかと考えた時にこのことが思い浮かび、環境問題に対してアートの側から表現してはどうかというアイデアが生まれました。

もちろん、直接、豚を表現するのではなく、ノアの方舟のようなニュアンスにしました。ノアの方舟の動物は神を失ってしまいましたが、最後には復活を果たします。作品には、それに加えて、近代化や、経済発展の時代にとっても疲れ、病気になってしまったというメッセージも込めています。この動物は、発泡スチロールの上から彫刻をして、羊の毛をさまざまな色に染めて貼っていったものです。この船が展示された美術館はもともと発電所で、作品のテーマである「環境」にふさわしい場所でした。実は、あまりにも作品が大きすぎたため美術館の入り口から入れられず、船を解体して搬入しました。船の上に掲げた白い旗は、文明自体は現実の前では無力で弱い立場であることを表現しています。この展覧会には、子どもをはじめ、たくさんのお客が来ました。この船を見て、いろいろなテーマで議論しました。動物たちには夢があるかなど、子どもたちとの意見交換もここで展開しました。

もともとこの作品のアイデアは、2013年から2014年春にかけて、クイーンズランドで展示した作品に基づいています。クイーンズランドはオーストラリアの中でも、とても環境がいい場所です。あまりによすぎて、調査に行ってもなかなかアイデアが思いつきませんでした。しかし人類の、地球最後の美しい理想の故郷といわれるクイーンズランドの州都ブリスベンが、もし本当にそれだけになったら地球の悲劇ではないかと感じました。そして私は、最後に残ったものを「水」で表現し、99頭の動物、肉食動物も草食動物も皆一緒に、もう戦わないで最後の水を飲もう、頭を下げて、謙譲的な命を見せようと考えました。パンダも狼も、皆一緒に。作品では水も砂も本物を使い、天井から流れる水の音を聞くこともでき、とても静かでした。お客さんは感動し、泣きました。

この展覧会はとても評価が高く、23万人の入場者のうち、他のまちや国からの入場者が11万人

もいて、クイーンズランド市の財政局の発表によると、直接の経済効果は 14 億円だったそうです。直接というのは、ホテルに泊まったり、交通手段にお金を投じることからくる経済効果です。私自身も、美術館の発表やニュースなどを見て、ちょっと驚きました。つまり、自分の展覧会は世界中でたくさんの人を集めるのだと感じたのです。

実は私は、この作品こそ中国に持ち込まなければいけないと思っていました。オーストラリアは環境がいいのに、私は環境をテーマにしたのです。そこで、環境の悪い中国に持っていくべきではないかと思い、上海の元発電所で展覧会をやらないかと提案があった時にこれを持っていこうと考えたのです。しかし、中国の場合、クイーンズランドの美しい水や砂を置くだけでは、桃園絵画のような昔のイメージに見えてしまう。それでは中国の現実にはつながらないと考え、せっかく発電所なのだから床を掘って池をつくりましょうと提案しました。館長もスタッフも、私の中国の環境問題に対する考えに共感して、賛同してくれました。こうして、美術館のコンクリートを壊し、掘ったところに池を設置しました。

ところが今度は、クイーンズランドからこの作品は貸さないと反対されました。なぜなら作品があまりにも美しく、とても愛しているため、上海のこんなに汚い、コンクリートを掘った場所に置くことは嫌だと思ったのです。そこで私は新しいアイデアを思いつきました。この池に墨を9トン入れ、墨の池をつくりました。オーストラリアでは動物がたくさんいて、色もあって賑やかでしたが、こちらの作品の池は墨で黒く、静かです。上からは墨の滝が循環しています。周りのコンクリートの廃品も、中国の昔の墨絵の山水画のようにアレンジしています。

中国では、ボランティアと一緒に火薬で絵を描き、人間がいなくなったら 100 年後にたくさんの動物が戻ってくるというコンセプトを表現しました。100 年前の中国の絵画を勉強して、火薬絵の素材として使いました。また私の故郷の焼き物職人をお願いして、白磁の作品もつくりました。春夏秋冬をテーマにしている、作品の上に爆竹を置いて爆発させ、磁器の 3 次元的な絵画ができました。こうした技術は経済の発展によってどんどんなくなってしまうけれど、アーティストが職人と仕事することで、地元の文化も保持し、元気づけることができるのではないかと思います。

上海で最も高い建築物だった発電所での作品は、160 メートルの煙突の中に空に向かうようにブランコをつくり、3 人の赤ちゃんの人形を乗せました。中国における大気汚染の問題を表現したいと思ったのです。ブランコが揺れると、観客は空気が流れていることを感じます。煙突の中でブランコが揺れ動くことと、赤ちゃんが乗っているブランコが静かに動くことで、空気の揺れと大気汚染に対する観客の心の痛みの揺れを対比させて感じるすることができます。

2006 年にベルリンで発表した狼の作品は、世界中で高い評価を得ました。この作品の 99 頭の狼は、見えない壁にぶつかって、戻って、またぶつかっていくという人間の永遠なる間違いの循環を表現しています。この作品は、今年の 7 月に横浜美術館でも発表します。7 年ぶりに日本で実現する私の個展です。ぜひ、皆さんも来てください。

2013 年にブラジルで行った「Da Vincis Do Povo」という展覧会では入場者が 100 万人を超えました。ブラジルの人間の 100 人に 1 人が展覧会を見た計算になります。ちなみに、囚人は展覧会に行けませんので、刑務所の中で、私の展覧会をテーマに自分なりの絵をつくりました。アーティストとして、社会に対して 1 つの貢献ができたわけです。

《エナジー》という作品の第一幕は、環境の死に対する葬式というコンセプトです。たくさん黒い火花があげられ、墨絵のように空に描きます。白、黒、白、黒。そして、緑が出てきて、草がたくさんある場面が変わります。第2幕のコンセプトは、思い出すということです。自然の死は、実は美しいということを表現したいと思いました。200mの高さに火花が目の前に上がると驚きます。第3幕では、いろいろな色が滝のように空から落ちてきて、希望の色の黄色で最後をしめくりました。

8分間の火花の作品で、昼なので光ではなく煙で表現したところ、なかなか絵画的になりました。もちろん、火花に使う粉は環境に悪いものを使ってはいけませんので、食品用の色粉を使用しました。インドでも、そういう粉を使ったお祭りを開催しています。でも、あまりにたくさん人を集めると、もし事故などが起こった場合、警察が問題視する恐れもあります。橋にも両岸にも何十万人という人が殺到するので、展覧会のVIPの人々を含む数千人にのみ情報を公開しました。実際に来た方には、使用している火花は食品用の粉で環境を考えていると説明しましたが、外から見ている市民はあまりの火花の量に驚いてしまいました。新聞の記事には「昼火花、アートか、あるいは宣伝か」というタイトルで書かれたり、環境アートと高い評価が書かれたりしましたが、環境的に疑問視する声も多々ありました。アートを社会に持ち込む場合、消防や警察などの公的機関とコミュニケーションを取り、さまざまなコミュニティと充分に対話をしてしまうと、アーティストにとってはよいアートをつくることができなくなってしまいます。私も、いい評価をもらうこともあるし、酷評されることもあります。しかし、それはすべてアーティストとして、自分の作品をつくっていくうえで1つのプロセスにもなります。

昨年の11月10日、北京でAPECが開催されましたが、私はAPECの火花をデザインし披露しました。各国の首相、オバマ大統領、プーチン大統領、安倍総理なども、その場にいました。

火花では、まず春を表現します。規模にして3,000mの長さです。春は誕生を表し、夏は成長を表現しています。そして秋は収穫、豊穰を表し、冬は収穫を表現しています。昔の小説のように、まず春が来て、詩があつて、表現する。夏が来て、詩があつて、表現する、というアジアの絵巻表現を用いています。

最後に、私は火花で2つの塔をつくりました。政府の大きなイベントで中国の春夏秋冬を表現するよりも、むしろ全世界、地球の自然や季節の美しさを表現してはどうかと考えたのです。音楽も中国のものより、いろいろな国の美しい音楽を使ってはどうかと自分なりの価値観を追求しました。しかし、やはり自分にとってはアート作品にはならないのではないかという気持ちもあつて、最後は、私の故郷にある2つの石の塔を表現しました。私から自分の故郷へのプレゼントです。故郷の市民たちもテレビ中継でこの火花を見て、すごく感動してくれ、感謝のメッセージを送ってきました。

環境にいい火花などあるのか、という質問も海外から多数ありました。私は、環境にいい火花を開発しないなら、火花を上げるべきではないと考えています。だからこそ科学者や製造工場、火花師たちとさまざまな研究を重ね、害がない火花、金属がない火花、呼吸しても大丈夫な火花の素材を開発してきました。もちろん、硫黄を100%使わなければ煙も透明になり、環境的にもいいですが、透明な煙では、この火花は本当に環境にいいのか警察も消防も判断できません。ですから、100%硫黄を使わずに火花をつくることはできていないけれど、実現したいと考えています。

火花は、我々の文明の中で大きな文化の1つです。もし、我々の手で環境に悪いから火花はやめようとなれば、それはまた問題です。ですから我々にできるのは、科学者やアーティストを集めて、

環境にいい花火をつくることです。実際に花火をつくる過程で、環境について考え、学び、模索すること自体にも価値があります。そしてそれは大きなメッセージです。なぜなら、花火だけは許しましょうというのが市民の声だからです。あれもこれも禁止してしまえば、なににもできません。やっぱり、夏になると花火を見たい。環境には少し悪いけれども、見なければいけない。だから、環境にいい花火をつくることに大きなメッセージが込められているのです。

この作品は当初、ゆりかごに赤ちゃんがいて、空から花火が降ってくるという構想でした。子どもは夢の中で船に乗って、太平洋の上で遊んでいます。この船では、21カ国の子どもたちが一緒に遊んだり、凧を上げたり、一緒に花火をしたりしています。風があつて、波も激しかった船の中で自然と戦いながら、虹が空に広がるのを見ているという、子どもの共同の運命をテーマにしました。よく見ると21カ国の子どもは、実は皆、APECにきた指導者たちの顔をしています。指導者たちは太平洋に浮かぶ船の中にいる同じ運命体ですよ、そして一緒に遊ばなければいけないですよ、というメッセージを込めています。

しかし、これは実現できませんでした。あまりにもアーティスト個人の意見に偏りすぎている感が否めず、結局、季節の花火だけになりました。もし実現していれば、この赤ちゃんのアニメーションの背景に季節の花火が出てくるはずでした。最初のアイデアが中国政府に拒否されてしまい、とてもつらかったです。アーティストとしてここに残る価値があるか、この仕事を続ける意味があるかどうか、いつも自問自答してきました。しかし、もしアーティストでなくなってしまうと、たとえば環境に関して、政府に強くいえるアーティストや科学者もいませんから、責任を持ってやり続けなければいけないと最後までやりました。

私は、各国の政治家や市長とも仕事をしています。2012年にはパリ市長と、セーヌ川に浮かぶ船を改築してラブホテルをつくりました。そのラブホテルには50セットのテントを設置し、世界中から50組のカップルを募集しました。カップルはテントの中に入って、好きな時にテントの中に設置してあるスイッチを押します。すると、川から花火が上がるという仕組みです。50組のカップルに対して、その夜は300回の花火の打ち上げを準備し、ほぼすべての花火を打ち上げました。夜には、川の両岸に140万人もの観客が集まりました。もちろん、すべてが私の作品を観に来たわけではありません。「白夜」というイベントで、その夜のパリは、ほとんどの店が朝までオープンしていて、パリ市長も私の隣に座って花火を見ました。

アルゼンチンのブエノスアイレスに、タンゴの発祥地であるポカという地域があります。100年前、ヨーロッパ人が大きな希望を持ち、未来を切り開いていけると信じてポカに渡りました。しかし結局、移民たちは失業し、お金が儲からず、毎日お酒を飲み遊んでタンゴを踊っていました。ポカの地域の歴史は長いですが、犯罪と貧困がはびこっています。私はポカでなにか生き生きすることができないかと、ずっと考えていました。そして下見にポカを訪れた際、人生は舞台だと考え、タンゴと花火を一緒にやりましょうと提案しました。

まず現地へ赴き、タンゴを学びました。そして地域文化を学び、地元の人とコラボレーションしました。火薬の絵画をつくりましたが、アルゼンチンの気候は火薬をコントロールしにくく、爆発させてしまったり焼いてしまったりと失敗をしましたが、結果的には迫力ある火薬の絵画が完成しました。火薬を爆発させるのを怖がるという作品がつかれないと、勉強にもなりました。

作品では常に、その地の素材を使い、アジアの思想や墨絵の美学も持ち合わせながら世界の文化と対話をし、新しい可能性を探っていこうと考えています。アジアと西洋を超えて、21 世紀にあるべき姿、そして共生する合作の方法も模索しています。

ポカのイベントでは、80 分間のパフォーマンスを披露し、25 万人を集めました。パトリングの動きのような花火もたくさん打ち上げました。アルゼンチンの 100 年の歴史をタンゴの音楽と踊りで人々に伝え、その夜はもう一度、歴史を遡って感じようと、パフォーマンスを介して伝えました。

犯罪の多いポカという地域に 25 万人もの観客を集めました。皆、作品を見たいから、その夜は泥棒も犯罪もなかった。それがアート力です。いつも仕事でポカに行くと、「気をつけて」といわれます。作業をするときに地元のヤクザから、駐車するならお金を払えといわれたこともありました。警察よりもヤクザが強く、警察もずっと守ってはくれないので、結局お金を払わざるを得ませんでした。でも、あの夜はそうではなかった。私の作品を見てヤクザが「すごい」といってくれました。

いま私は、東アジアの子どもための島をつくっています。ネット上に空想の島をつくり、その島にたくさんのアート工房をつくらうというプロジェクトです。私自身も、インスタレーションをつくれる工房や、花火をつくる工房を開発しています。今後は、日本、韓国、台湾、香港のアーティストや建築家、デザイナーたちと一緒に、この空想の島で子どもの未来のためにおもしろい知恵を開発し、対話と交流ができる工房をつくりたいと考えています

そのほかにも、私は中国で現代美術展をキュレーションしています。いま、中国の現代美術はオークションでとても高く売られています。しかし、中国のアーティストの創造力を評価し、支援しているかどうかは別問題です。中国の政治課題や社会主義に注目しているから、あるいは中国は今後大きくなると想像できるからアートを支援しているのかもしれませんが。キュレーターとして私は、中国の地方から作品や才能を見つけます。たとえば、いまコミッションしているのは農民で、彼は彫刻をつくります。有名な中国人作家の絵画も彼の手で彫刻になります。私は 500 件くらいのさまざまな作品を依頼していて、これらの作品で中国の現代美術を読み解こうとしています。

もう 1 つ、私は自分の故郷の山の中にシンクタンクをつくらうと、私財を投じました。公的資金を利用するといろいろと左右されるからです。政治にできないことを、アートでなができるかを課題として、ヨーロッパやアメリカ、日本のシンクタンクとも対話をしたいと考えています。このシンクタンクでは、さまざまな研究活動や発表会などもできるようになります。カリフォルニアにもシンクタンクをつくらうと考えていて、いろいろな講演会やイベントもしようと考えています。

私の故郷は、唐の時代から多様な文化を持ち、イスラム教、インド教、マニ教も盛んでした。この古いまちから、もう一度、新しい時代の思想と理論ができないかと考え、まず、フランク・ゲイリーさんを招きました。まちの美術館をデザインしてもらい、それだけでなく、賑やかなアートイベントの裏にある思想と価値観を探し出せないかと考えています。フランクさんは 88 歳ですが、とても自由で前衛的です。彼も中国文化を学んで、少しずつ中国文化とつながることもできています。

日本ではいわきで、1994 年に廃船を使って塔をつくりました。東日本大震災の後は、地元の人々と一緒に「サクラプロジェクト」を始めました。オークションなどで資金を集め、それを支援金としながら山の中に美術館をつくっています。さらにその美術館運営のため、99m の高さの建物の屋根に故郷の瓦を置き、火薬で爆発させて、その瓦に私がサインをするというイベントを開催して 3,000

万円の寄付を集めました。震災があつて、皆、故郷をどうしようかと考える中で、美術館を建てて、市民や子どもたちを集める広場をつくるのはとてもいいことです。私は毎年そこを訪れ、市民とイベントを行います。昨年イベントは屋台美術館で、いろいろな屋台を美術館に出して、いわきの食べ物はおいしいですよと観光客を呼び込み、地元の子どもとさまざまな催しを行いました。

最後に、活動を振り返って思うことは、アートは社会の価値をつくることができるけれども、それぞれのアーティストによって目的は違うので、すべてのアーティストに対して、社会的な価値を求めるのは適切ではないということです。私は、アートによる自身の発見と楽しさを目的にしながらも、結果的に自分のアートが社会に貢献できたなら、それは大変に幸せなことだと考えています。アートは弱いものです。社会を創造できるか、GDPをつくれるかというと、それは表面的な文化産業になってしまう。アートはあくまでも弱く、だからこそ本物になれる。アーティストにできることはとても小さく、きわめて限られています。巨大な政府と社会の前で、1人のアーティストは弱くて小さな存在です。だからこそ、その行為を大切にしなければならないと思うのです。どうもありがとうございました。